

源氏物語車争凶屏風

■京都市歴史資料館で平成21年4月24日(金)から同年5月17日(日)まで(月曜・祝日休館) ■5月7日(木)午後2時から 展示解説(申込不要)

源氏物語が記録にあらわれ、平成二十年で千年たつそうです。『紫式部日記』の中に、源氏の登場人物紫の上むらさきのうへのことが話題にされていて、このことが寛弘五年十一月一日のことだと書かれています。寛弘五年は一〇〇八年に相当することから平成二十年すなわち二〇〇八年で千年というわけです。

京都では「源氏物語千年紀」の名でいろいろな催しがありました。そのなかで大活躍したのが、京都市歴史資料館が所蔵する「源氏物語車争凶屏風」です。実物を展示したのは、京都文化博物館の「源氏物語千年紀」展と、京都アスニーの「源氏物語と平安京」展ですが、この屏風の複製や写真はいたるところで目にする事ができました。左上の図は、国際美術創造会の第二十一回国創展(十月二十八日〜十一月二日)で展示された一・五倍に拡大されたデジタル複製です。また、五月の葵祭では、上賀茂神社に高さ五×幅十七mの巨大パネルが展示されました。

今回は、千年紀を回顧し、源氏物語車争凶屏風を特別に公開します。この屏風は京都の旧家に伝えられた江戸初期の作品。六曲一双(六枚折の屏風がふたつで一セット)です。高さが百五十七cm、幅がそれぞれ三百六十cmです。

車争くるまをうというのは源氏物語葵の巻の一場面です。賀茂祭(葵祭)の前に賀茂の新斎院みさきいらえの禊祓みそぎはらえが行われ、その行列を見物する人が一条通に群集します。なかでも行列に随伴した光源氏は注目のまです。

源氏の正室葵の上と、源氏の恋人六条御息所みよすぢの車は、見物のためにとめる場所を争い、葵の上の車が御息所の車を押しつけて御息所に屈辱を与えるというあらすじです。この場面は源氏を描く絵画の恰好の題材になりました。



こちらが左隻。一条通の中央を、右から左へ葵の上の牛車が見物人を押しつけて通る。その脇では六条御息所の車をむりやりにどけて葵の上の車をとめようとす従者が、御息所の従者にとらみあっている。すでに実力行使に至っているのか、乗降台である榻(しじ)が脚の折れたままころがっている。



こちらが右隻。見物の人や牛車が集まる一条通を右のほうから騎馬行列が通る。ちょうどまんなかあたりに、顔を白く塗って馬に乗っているのが光源氏。見物の視線を集める。